

ブリティッシュ・コロンビア大学留学記 : ITAプログラムを中心に

MIYAZAKI, Kenji / 宮崎, 憲治

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

74

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

2007-03-05

【学界消息】

ブリティッシュ・コロンビア大学留学記

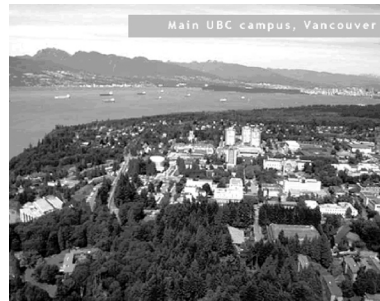
—ITAプログラムを中心に—

宮崎 憲 治

はじめに

私は、2004年9月1日から2006年3月31日まで、訪問研究員として、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学（以下UBC）に滞在した。UBCに経営学部はあっても経済学部（Faculty of Economics）は存在しない。私が所属したのはFaculty of Arts（教養学部のようなもの）内の経済学科（Department of Economics）であった。UBC経済学科の規模は法政大学経済学部に比べて小さいが、北米の20位以内に入る非常な優秀な研究者が揃っている学科である。そこに所属することによって、大学の図書館をはじめとする様々な施設を利用したり、自らの研究成果を報告する機会を与えられ、非常に有益な留学であった。

このエッセイでは、研究についてでなく、UBC在籍中に私が参加したITAプログラムを説明したい。ITA（International Teaching Assistants）プログラムは、UBCのCIC（Centre for Intercultural Communication）が提供している、大学院の外国人留学生がUBCの授業で教授のもとでティーチングアシスタント（TA）なる



ための講習プログラムである。毎年秋と冬に開かれ、毎週夕方から3時間（一度だけ7時間）の合計10回おこなわれる。そこで、個別およびグループで授業プランをつくったり、効果的な授業について討論し、模擬授業をおこない、出席者が互いに改善点を指摘しあう。その模擬授業はDVDに録画される。なおITAプログラムのウェブページのアドレスは<http://cic.cstudies.ubc.ca/ita/index.html>である。

以下、ITAで私がどのような経験をしたかを簡単にのべる。特に日本に帰国したあとも自分の授業で役立っている方法を具体的に説明したい。

ITAプログラムとは

友人からこのITAプログラムの話を聞き、非常に興味を持った。それまで大学や大学院の授業に聴講してきた。そもそも北米と日本の学生の気質が違うということもあるかもしれないが、明らかに教員も非常に熱心で教え方もうまい。私は、その教育の仕方に多少、興味があった。また自分の英語の運用能力の向上に役立つのではないかと考えた。そこで訪問研究員でも参加可能か問い合わせた。返答は、このプログラムは秋と冬に実施し、秋は非常に混雑するが、冬は比較的空いているから、インストラクターが許可すれば可能というものであった。そこで1回目にインストラクターに直接かけあって参加をさせてもらった。2006年の1月（帰国3ヶ月前）に受講した。なお、このエッセイを書く際にITAプログラムのウェブページを最近（2007年1月初旬）訪れてみたが、いまでは訪問研究員も受け入れ可能となっている。もしかすると私が前例を作ったのかもしれない。

ITAプログラムの参加費用は無料であった。今後のUBCの教育水準を上げるための投資と考えているのであろう。私は、それにただ乗りしてしまった。なお、無料といいつつも、正確には、最初に25カナダドル（約2500円）を支払い、最後まで授業に出席した場合に返金する制度である。これは、自分でこの25ドルを捨てなければならぬと考える学生の参加のため

らわせ、ドロップアウトしない学生を逆選抜している。さらに、支払ったお金は埋没費用とはならず、どんなに忙しくても、最後まで続けるインセンティブを与えていた。実際、私が参加していた火曜のクラスでは誰もやめなかった。このシステムは、私の今のゼミに应用され、半期の最初に3000円徴収し、半期の最後のコンパ代に充当するようにしている。

私の参加した火曜日のクラスは出席者は20人くらいであった。別の木曜日クラスのほうが少し多かった。火曜クラスのうち半分が中国人と韓国人などのアジア人、3分の1くらいが南米から来た人であった。日本人はこのクラスでは私だけであった。一度だけ火曜と木曜のクラスが合同でおこなったが、木曜日のクラスでも日本人は1人だけであった。また経済学科から参加した人も、木曜のクラスに1人いたが、私のクラスにはいなかった。インストラクターはカレンとビョーンの2人であった。TAはトーマスとリリーという名で、このITAプログラムに過去参加したことがあるドイツ人と中国人¹⁾の院生であった。

自己紹介

最初のクラスでは、講義資料が配られた。資料は、表紙がUBCのKoerner図書館²⁾のバインダーに挟まれていた。それに沿って、このクラスの目的をインストラクターが説明した。コースのシラバスは次のように目的がかかれていた。

この

プログラムを受講すれば、

- カナダの教育システム、学部、生徒を理解し、
- 様々な教育スタイルについて馴染み、

1) ほとんどの中国人は、海外生活に馴染むように、また職業差別を受けないように、本名以外の名前を付ける。日本人と韓国人はそのようなことはほとんどしない。

2) 私はこの図書館を非常によく利用した。UBCはよく映画やTVドラマに使われるが、この図書館は特に使われている。

- ・インストラクターとしての自信を強め、
 - ・北米大学環境において英語での効果的に意思疎通し、
 - ・自分が教え方にフィードバックを受ける、
- ようになる。具体的に、このプログラム内で、
- ・それぞれ個人のおよびグループのプレゼンが録画され、
 - ・文化における相違点や類似点を、UBC のケーススタディや自身の経験を
使い議論し、
 - ・クラス内でコミュニケーションおよびティーチング技術を訓練する、
ことを予定している。



まず、みんながうち解ける (ice break) ように、各自、自己紹介をおこなった。ただ、通常の自己紹介とちがい、各自Life Mapを作り、それをもとに即席のプレゼンをおこなった。Life Mapとは、自分の人生について、一枚の絵にまとめたものである。

通常の自己紹介の場合、何を言ったのか覚えていないことが多い。しかし、簡単な絵があるだけで聞き手は非常に強い印象を持つことができる。なるほどと思い、2006年度の入門ゼミと自分のゼミでLife Mapを使い自分自身の自己紹介をおこなった。

まず、インストラクターの2人が実践した。カレンは世界地図を書き、どこにどれくらい住んでいたかを説明した。カナダで生まれ、南アフリカで育ち、イギリスで教育を受け、フランスで働き、10年ほど前にUBCで勤めるようになったと紹介していた。ビョーンは、世界各地にいったというわけでないので世界地図ではなく、一本の蛇行した線を描き、それぞれのイベントに簡単な絵を描き、半生を語っていた。編集者として働いていたが5年前にその仕事をやめ生涯教育の博士課程で研究していると自己紹介していた。インストラクターの例をみてどう書けばいいのか理解したあと、

生徒はしばらく絵を描く時間をあたえられた。

各自の発表の順序は、自発的におこなわせた。日本ではこういう場合、誰も自発的には手をあげないが、早速、香港人のペンが手をあげ話し出した。数学教師だったが、もっと勉強したくてやめてこちらに来たという話であった。非常に訛りがつよく、何を言っているかわからなかったが、絵がうまく、だいたいの話はわかった。後で聞いたところ、漫画を書くことが彼の趣味であった。彼とはのちのグループプレゼンテーションで一緒になり、よく話すようになった。彼は、日本の漫画が大好きで、私にいろいろ最近の漫画の話をしてきたが、私はあまり知らずうまく答えられなかった。

私は、おそらく最後から4番目くらいに手をあげた。日本地図とカナダの地図を、縮尺を無視して描き、説明した。京都の大学で博士号をとり、東京の大学で仕事をし、UBCに訪問研究員としてやってきたといったつもりである。しかし、後で生徒たちと話す際に、何度も大学院生と間違えていたので、きちんと伝わっていなかったようである。ただ、絵のおかげで日本から来た人ということはわかってもらっていた。

以上のことを初回におこなった。まだまだクラスはよそよそしい雰囲気であった。

文化の違いについての議論

2回目は、みんながうち解けることの続きと称して、トランプをつかったカードゲームをおこなった。4・5人ごと5つのグループにわけ、ゲーム中は一切言葉を使うことが禁止された。それぞれのテーブルでルールを書いた紙が配られ黙読した。ゲームで勝った人が時計回り側の、負けた人が逆回りのテーブルに移るといものである。具体的なルールは忘れたが、数字の2が一番強く、黒札より赤札がつよいというものであった。

ゲーム開始。私は、最初にあっさり負け、テーブルを移った。次もあっ

という間によくわからないまま負けた。ただ、そのテーブルに来ていた別の人が不審そうな顔をしていた。次のテーブルで、私もようやく彼が不審そうにした理由に気づく、勝利条件が違うのではと。ただ、しゃべれないので手振りで2つのカードを見せ、私が強いと思う札をより高く上げて説明しようとした。そのテーブルにいる人は首をしていた。そしてQueenの札をみせつけ、最も強いというような手振りをしていた。

このテーブルで、私はトップをとれなかったが、ビリにはならなかった。そして新しい人たちがやってきた。そこで、新しい人たちはルールが違うのではないかと主張していた。私を含め既にテーブルにいる人たちは、そうではないといて、ここでのルールを手振りで説明する。こうしたゲームを6回ほど繰り返した。

そこで終了。インストラクターたちが感想を求めた。しゃべれなかったストレスが皆が爆発するように話し出した。ほとんどの人が、最初はそれぞれルールが違うのでとまどったが、だんだんそのルールに馴染んで、新しく来た人たちにそのルールを強要したようだ。なかには強者がいて、自分が来たのにもととのルールを変更した。

インストラクターは、話をさせる時間をあたえたあとに、このゲームの本当の趣旨を説明した。趣旨は、おもに文化における相違点や類似点を議論するための準備であった。つまり、何が正しいかどうかの価値観はその地域によって違い、さらにどれが正しいかという絶対的な基準はないというものを、ゲームを通じて経験するものであった。

なるほどと感心をしつつ、次にアンケートらしきものが配られる。6つの質問があり、それぞれの質問に7段階のランクがあった。例えば、ある質問では、左側に誰かに意見を述べるときに相手の顔をたてて間接的にすべきとかかれ、右側にどのような場合でも直接的に意見を言うべきとかかれ、それらの間に左から右に1から7の番号があった。別の質問では、1の側に、ルールはどんなことがあっても関係より重要であるとかかれ、7の側に、関係の方がルールより重要で、状況によりルールを変更すべきと

かかれていた。こうした質問6つについて、自分の文化的背景はどちらの傾向が強いのか1から7からえらぶものであった。

記入した後、テーブルを片付けられた。足下をみると、すでにテープによって一本の線が貼られていた。よくみるとその線の垂直方向に7つのテープが貼られていた。そこでインストラクターその線のある端が1に対応し、別の端が7に対応しているといって、それぞれの質問に対しどこに位置するかを移動するように指示した。質問ごとに、結構ばらつく。極端な両端の人にたいしてインストラクターが意見を求めた。他人に意見をいうときに間接的にすべきという質問で、私が一番端に来て、私自身がそうでないが日本文化はそういうものと勝手なコメントをした。端で来ていない人でも、自分の意見を主張する人が続出して、クラスが活発化して、言い足りないうちに授業は時間切れになった。

以上が、2回目の内容であった。だんだんクラスの人たちが仲良くなってきていた。私も帰宅方向が同じ韓国人たちと、クラスの内容について話しながら帰えるようになった。

授業プランのつくりかた (BOPPPS)

3回目は別の曜日におこなっているクラスとの合同で、週末に朝から7時間つづけて実施された。最初に、みんな立ち上がって、めいめいにパートナーをみつけ、自己紹介と自分の文化について語った。一通りしゃべった後、また別のパートナーをみつけていった。しばらくして、インストラクターが今日のメインの目的を説明した。どのように授業プランを立てるかである。このITAプログラムのなかで、最も重要であると強調していた。

授業プランについてはBOPPPSというものを提唱した。BOPPPSはBridge-in, Objective or Outcome, Pre-assessment, Participatory Learning, Post-assessment, Summaryのそれぞれの頭文字をとったものである。当日の配布された資料によると、それぞれ次のようなものである。

- 1) (Bridge-in) 学習サイクルの最初。学生の興味をひく、学生のモチベーションを作らせ、どうしてこの授業が重要なのかを説明する。
- 2) (Objective or Outcome) 学習意図を明確にする。授業が終わったとき、どのような条件の下、どの程度、何を、学習者が認識・考察・評価・実践するかを明確にする。
- 3) (Pre-assessment) このレッスンの主題について学習者が何を既知っているかという質問を投げかける。
- 4) (Participatory Learning) これが授業の本体。そこで学習者を出来る限り積極的に関与させるように努力する。明確に示した目的を学習者が着実に身につくことが出来るように様々な工夫をこらさなければならない。必要に応じてメディアを使う。
- 5) (Post-assessment) 学習者が目的を達成したかどうかをフォーマルな形であれインフォーマルの形であれ確認する。
- 6) (Summary) 学習者に簡単に反芻する機会を与え、学んだことを体得させ、学習サイクルを締めくくる。

特に、資料では、2番目の学習目的に重点をおいて説明されていた。学習目的には、1) Performance, 2) Conditions, 3) Criteriaの三つの要素が不可欠であるといわれた。何ができる (Performance) のかを具体的に書き、それがどういう条件の下 (Conditions) で、どの程度なのか (Criteria) かも明示しろと指導された。経済学の例で言えば、この授業の終わりに、教科書を参照することなく、需要曲線のシフトによる価格と数量の変化についての例を3つ挙げるができる、というようにである。

こうしたBOPPPSについてかかれた資料の分量は10ページにわたるものであった。当日配られた資料を、短い時間でより有効に理解させるために、Jigsawという手段をもちいていた。具体的には次のような手段である。BOPPPSは扱う項目が6つあるので、6人以上からなるグループをいくつかつくる。それぞれのグループで6項目のうちどれかを担当させる。それぞれ担当した項目について熟読する。熟読した後、項目ごとに集まる。そ

してどのようなことを学んだかを同じ項目を読んだ人同士で議論する。そしてその後もとのグループに戻り、各項目ごとにどのようなことがかかっているのかを、その説明を読んでいない人たちに説明する。こうすることで時間を節約しつつ、相手に説明しなければいけないというプレッシャーのもと自分の箇所を積極的に理解しようとする。このJigsawは、カナダから帰国後、私の入門ゼミと本ゼミで頻繁に使い、効果をあげている。

そうしてBOPPPSについて学習した後に、即席で授業プランをグループごとにつくることになった。模造紙を与えられ、どのようなことを授業で使うかを話し合った。私たちのグループはバンクーバーでのバスの乗り方についての授業を説明することに決まり、それぞれの項目についてどうするかを話し合った。そして非常に短い時間の中に書き上げ、各グループの代表者がそれぞれ報告した。他のグループでは、イタリア人のいるところではピザの作り方とか、箸の使い方など興味深いものであった。

学習目的の書き方について、非常に重要なので、別角度からも学習をした。三つほどの学習目的をかいた文章をみせて、それがどのような問題があるかについて各自訂正させて、その後にグループごとに改善点を議論し、訂正案を提示した。先に説明した、1) Performance, 2) Conditions, 3) Criteriaの三つが入っているかどうか、書けている場合にはどうすればいいかを議論した。他にも、具体的な文章の書き方として、“I will…”と自分に主語とするのでなく、“You can…”と学習者の立場で書くように指示され、使われる動詞もunderstandという受身の動詞を使うのでなく、explainといったより能動的な動詞を使えと指示された。学習目標に使われる動詞のリストが資料として配られた。英語の授業をする必要はないけれど、このリストは論文を書く際に役に立っている。

また、困った学生の対処方法などを議論した。クラスの後ろで同じ国籍の人たちが固まって英語以外の言葉話しているグループへの対処法、クラスの人と溶け込もうとしない学生の対処法などいくつかの具体的な例をとりあげ、そうした人たちはどう扱うのかについて、解決策をグルー

ブ内で議論して、グループごとにそれぞれ一人の人を選んでそれを報告し、他のグループの人に意見を求めた。日本の授業で散見される私語する学生や全く質問しようとしなない学生についての対処法は残念ながら話題にならなかった。

以上が3回目の内容である。3回目は、午前9時から午後4時まで休憩時間を含めて7時間おこなわれた。昼ごはんはバイキング形式となり、クラスは非常に打ち解けたものになった。別の日に、クラス内のマナケというインドネシア人が餃子パーティを企画し、一緒になって飲茶をつくったりもした。

個人プレゼンテーション

4回目から6回目は、3回目にあつかったBOPPPSをつかい個人で授業プランをつくり、10分間プレゼンテーションの発表が行われた。多くの人が自分の研究内容を発表した。たとえば、手話について、糖尿病の予防、環境問題などさまざまである。プレゼンの後に質疑応答があり、そのあとに評価を生徒同士でおこなった。なお、プレゼンの模様は録画され、そのDVDを各自に配布された。

私は、経済学の機会費用について説明した。あることをするにはそれをしたことによってあきらめなければならない費用を考えなければいけないという話を具体例をあげて説明した。時間が余ることをおそれ埋没費用の話も準備したが、結局、機会費用だけで時間切れだった。講義のために、OHPシートを作り、また理解度の確認テストとして○×クイズを作った。授業の目的は、次のようにまとめた。By the end of this lesson, you can explain the opportunity cost using a few examples.

通常、私が英語でプレゼンをする際の国際学会では、一方通行的に原稿を読み上げればよい。しかし今回は原稿読みはやらぬ文章を暗記しようと思心に決めた。しかし、暗記するためには時間がかかるので、OHPシートに

なるべくしゃべる予定の文章をそのまま載せ、それを困ったときに読もうとした。実際、あとからビデオで見直すと、聴衆者よりOHPにより写されたところばかり見ていてアイコンタクトもとれていなかった。

フロアからの評価でも、アイコンタクトがなかったなど指摘された。また、北米では書かれていることを読み上げられる授業は、教員が創意工夫のない授業をしていると判断されるといわれた。OHPシートにはフルセンテンスを書かず、フレーズを中心に書き、その場で文章を構成するように、指摘された。評価すべき点として、確認テストを配り、それをみんなで一緒に○か×かを一緒にインタラクティブにやったのがよいやり方であるといわれた。トピックが面白かったともいわれたが、これは僕というより経済学が面白いということであった。

具体的に相手にどのような評価をするかについては後述するが、各自のプレゼンをした後のインストラクターの対応に触れておきたい。プレゼンが終わった後にインストラクターは、いくつかのチェックポイントが書かれた紙をつかい、他の生徒に評価を文章でまとめるように指示させた。その間、インストラクターは発表者を別室に呼び、感想を聞いた。インストラクターは聞くことに徹して、助言をしなかった。発表者がああすべきだった、今後こうしたいということを行わせて、インストラクターは発表者が言ったことを整理し繰り返すだけだった。おそらく自らの口からしゃべったことしか改善しないという方針で、意図的にやっていたと思う。わたしも帰国後、この点は非常に参考にし、ゼミなどでなにか発表をさせた後、自分からの意見はなるべく言わず、相手に改善点を自発的に見つけさせようと試みている。

7回目から9回目は、グループのプレゼンをおこなった。ただ、個別プレゼンやグループプレゼンをやっている週でも、授業にまつわる様々な局面を議論した。例えば、質問の答え方、評価の仕方、学習タイプ別指導法、積極的に学生が授業に参加する方法などを議論した。また、UBCの学生から最も評価が高かったTAを呼んで模擬授業を披露してもらったりもした。

以下、グループプレゼンがどのようなものだったのかを説明する前に、質問の答え方、評価の仕方、学習タイプ別指導法について説明したい。

質問の答え方 (TRACT)

まず、どのように質問に答えればよいか、についてITAプログラムはTRACTを提唱している。TRACTはThank, Rephrase, Answer, Check, Thank againのそれぞれの頭文字をとったものである。それぞれ具体的に次のように説明する。

- 1) (Thank) まず、質問したことについて生徒に感謝をする。なにかポジティブなことをいう。例えば、「ありがとう、とてもいい質問です」などという。
- 2) (Rephrase) 質問を言い換える。これによって、質問の意図を確認でき、なにより他の生徒がどんな質問をしたのか聞けることができる。例えば、質問した生徒に対して「君の尋ねたことは…ですか?」、他の生徒に対して「先ほどの質問は…です」などという。
- 3) (Answer) 質問に答える。質問した人だけでなく、クラス全員に対して答える。質問者から離れて、全体をみて、みんなに聞こえる大きな声で話す。
- 4) (Check) 生徒に確認させる。質問した生徒に自分が正しく質問に答えたかどうか、また、わかったかどうかを聞く。たとえば「これで、質問に答えたことになりましたか?」などという。
- 5) (Thank again) 再び、質問したことについて生徒に感謝をする。他に質問が無いかと聞く。例えば「質問ありがとうございます。他に聞きたいことありますか?」などという。

質問について答えられないときにどうすれば良いかもアドバイスをうけた。まず、どのような質問でも、質問してくれたことに感謝する。そして、はっきりと、「わからない」と言い切るのではなく、よりソフトな言い方を探

す。例えば、「いまのところ、答えに自信がもてない」、「考えるのにしばらくかかる」、「この質問はいますぐ答えるより、もうすこし深く考えるのに値する」、「それについて最近何らかの進展があることは知っているけれど、フォローしていない」などいう。その上で、答えを得るための提案をするようにする。例えば、「もし授業が終わった後に5分ほど時間があるなら、一緒に考えよう」、「それについてしばらく考えてみます。わかれば、あとでE-mailします。」、「この質問は来週の授業の課題の一つにします」、「明日、私の研究室に来てください。一緒に議論しましょう。」、「他の人がどう思っているか聞いてみましょう」などという。

こうした質問の対処については、学会報告の際の質疑応答に非常に役立っている。ただ、残念ながら日本の学生は質問をあまり授業中にしてくれないので、使う機会がほとんどない。

評価の仕方（サンドウィッチアプローチ）

どのようにフィードバックをすると効果的かも議論した。ITAプログラムはサンドウィッチアプローチを提案していた。なぜサンドウィッチなのかというと、ネガティブなことをいう前後にポジティブなことをいうからである。具体的に次の順序で説明する。

- 1) まず、生徒がうまくやったところを見つけてほめる。たとえそうすることが難しい場合でも、とにかく何かポジティブなところを探し出す。
- 2) 次に、改善が必要な箇所³⁾をのべる。前向きな提案をする。場合によっては、その点に対して生徒にも議論に参加させる。また、コメントの根拠をあたえるために、例をあげるようにする。
- 3) 将来に対する希望的観測でフィードバックを締めくくる。再び、褒め、元気づける。自信をもって、改善点については実行可能であると生徒

3) 決して欠点 (weak points) は言わなかった。改善点 (improvements) や提案 (suggestions) が用いられた。

にあってあげる。忘れずに、生徒のやったことに対して感謝する。

このサンドウィッチアプローチで特に注意することは、フィードバックの際に、長所を強調するときでも、改善点を言及するときでも、つねに具体的に言うようにすることである。生徒の発言や立居振舞について、良いとか悪いとか評価をするのでなく、叙述するようにする。そしてその影響を明確に述べる。例えば、「発言中にペンをカチカチすると、気が散る」などという。そうして、特にネガティブなことを言及する際には、どうすれば改善できるか解決策を提案するようにする。この評価の仕方は、私もゼミで実践をこころがけているし、学生にプレゼンを評価するときにもこういう点を気をつけるように指導している。

学習タイプ別指導法

また、生徒によって得意が学習スタイルがあることを気付く機会ももらった。その目的のため、ITAクラスの2日くらい前にTAからメールが来て、以下のサイトにアクセスして、アンケートに答えるように指示された。

<http://www.engr.ncsu.edu/learningstyles/ilsweb.html>

このサイトでは44項目の二択の質問提供されている。それを答えると、自分がどのような学習タイプが向いているのかを示してくれる。それぞれ4つの観点がある。列挙すると次の通り⁴⁾である。

- 1) (Active and reflective learners) 前者の学習者は、議論や他人に説明するなど行動することによって、情報を理解し記憶することが出来る人間で、後者はまずじっくり考えることを好む人間である。
- 2) (Sensing and intuitive learners) 前者の学習者は事実を学習することを好むが、後者の学習者は可能性や関係を見つけ出すことを好む。前者は細部の記憶に長けているが、後者は抽象的な議論を好む。

4) くわしくは以下のサイトに書かれている。

<http://www.ncsu.edu/felder-public/ILSdir/styles.htm>

- 3) (Visual and verbal learners) 何かを記憶する際、前者の学習者は図表を見ることが、後者の学習者は読むことや話を聞くことほうが有効である。
- 4) (Sequential and global learners) 前者の学習者は理解する際に段階を追って、論理を積み上げるいくことを好み、後者は細部にこだわらず全体像をつかむことができる。

こうした学習タイプに自分や他の人がどちらに属しているかをクラス全員で実行した。予想以上にばらついていて、そのうえ4つのグループを分けてどのようにそれぞれのタイプがどのように学習すれば効果的か議論した。

このアンケートを自分のゼミで実行してみた。結果、学習者のばらつきはあまりなかった。具体的には、active, sensing, visual and sequential learnersがほとんどであった。つまり、グループ学習を好み、抽象的な議論が苦手な、言葉より図表での学習を好み、全体像をとらえるのが苦手な人がほとんどであった。こうした結果を意識して自分のゼミではグループ学習を重視し、私はなるべく、具体例を挙げ、絵をつかった説明を心がけている。

グループプレゼンテーション

さて、グループのプレゼンは7回から9回にかけておこなわれた。それぞれ2・3人のグループに分けて、20分間のプレゼンテーションを実施する。内容は、幼児インターネットによる教育、金魚の育て方、中国の正月、不倫など多岐にわたっていた。私は韓国人のキジューと香港人のペンとの3人でチームを組んで実施した。メールを使いやり取りしながら、時には直接会って、準備をした。テーマは紆余曲折の末「研究ファンドの申請書の書き方」になった。どのように研究ファンドをもらうのかについて、ファンドをどう探すのかとか、書く際にはどの点に注意するかについて説明

することになった。私はファンドの書き方について気をつける点をおもに報告することにした。報告の目的は、次のようであった。After the lesson, you can write and submit an effective proposal immediately !

3人が順番に報告することにした。私は2番目であった。一度3人でリハーサルをした。原稿片手に読み上げたものであったが、所定の時間以内に収まっていた。しかし、本番では予想以上に時間がかかり、3番目の報告者が十分にプレゼンができなかった。あとの質疑応答で、時間切れで十分に報告できなかった人に対して、どのようなことを話すつもりだったかという質問をしてくれたので、なんとか全員報告することができた。フィードバックでも、時間管理が甘いというものであった。評価されたのは、3人のコンビネーションであった。1人が質問をフロアに投げかけたときに、反応がよくなかったり、十分な答えが返ってこないことを予定して、報告者が同じ仲間に答えを用意しておくことにし、実際にそのような場面があり、仲間が答え、プレゼンの方向を誘導した。この点は評価された。あと私自身に対してのフィードバックは、個人で行ったプレゼンテーションより着実に改善されてたという点であった。ただし、録画したものを見返すとそれは褒めすぎである。

いずれにせよ、3人は報告の後、大学のパブで慰労会を実施した。UBCはキャンパス内にパブをもっている。火曜日は2ドル(約200円)でビールが飲めた。いつもの半額である。韓国人キジューは奥さんも連れてきた。私も妻を連れてきて5人で楽しく飲んだ。キジューは野球好きでUBCの森林学部の博士であった。法政大学の法学部のように、UBCでは森林学部がもっとも権威ある学部である。そこで、環境の研究をしている。指導教官から経済学の勉強もするようにいわれ、経済学科の授業に出ている。彼の奥さんは彼と同じ博士コースに進学するために準備中であった。日本語がしゃべれ、日本語の研究論文を韓国語に翻訳するアルバイトをしているそうである。残念ながら恥ずかしがって日本語を披露してくれなかった。香港人のペンは先述したように漫画好きで、高校教師をやめて留学に来てい

た。彼の専門は統計学である。話を聞くと、統計理論を幾何学的アプローチから分析しなおすが、私はよく理解できなかつた。キジュー夫婦とは帰り道が一緒で、帰り際、食事会を約束したのだが、私たちはすぐ帰国したので都合がつかずその約束を果たせなかつた。非常に残念である。

最終回

さてITAプログラムの最終回は、ポットラックパーティー（potluck party）であった。ポットラックパーティーとは、各自が食べ物を持ち寄って、食べるというものである。ちなみに、アルコールは一切なかつた。ブリティッシュコロンビア州は、許可が下りているレストラン以外で公共の場所でアルコールを飲むことが違法な州である。みな手料理やお菓子やジュースなどを買ってきた。私も、あられなどを買ってもってきた。食べながら授業の反省会をした。基本的にインストラクターに対する感謝などであった。私たちの感謝の言葉でインストラクターのカレンが泣き出した。学生の一部もそれにつられて泣き出した。その後、有志があつまって学内のパブに飲みに行った。

私は、翌日に帰国のためアパートを引き払うことになったので、その旨をつたえると授業に役立ててと皆から励まされた。中国人のイライジャから、UBCに留学する女子学生を紹介するように強く言われた。OKといったが、一度も約束を実行していない。また、このクラスの受講者だけでメイリングリストがつくられ、たまにメールがまわってくる。それによると、いまでも細々と定期的に集まっているようである。去年の夏もノースバンクーバーでハイキングに行ったようである。わたしももう少しカナダにいれば、彼らとの交流を深めたであろうに非常に残念である。



おわりに

以上が、ITAプログラムの概要である。思いついたまま書き進めていったが、書きながら、非常に興味深い体験をしたことを再確認した。幸運なことに私はアジア人のため、比較的若くみられ、大学院生たちも私を対等に扱ってもらい、学生時代に戻った気分であった。こうした機会を与えて頂いた法政大学経済学部教授会に感謝したい。このITAでの経験を是非、授業で活かして、経済学部に恩返ししたいと考えている。